

---

# IS ~運命を切り裂く剣~

ジョーカーアンデッド

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IS（運命を切り裂く剣）

### 【Zコード】

Z6220Z

### 【作者名】

ジョーカー・アンデッド

### 【あらすじ】

ISを唯一使える男がいた。  
運命を変えた一人の男がいた。  
この二人が出会うとき、何かが起こるー。  
運命の切り札を掴み取れ！

## プロローグ（前書き）

独自設定を、含んでおつます。

まだまだ未熟者ですが、宜しくお願いします。

## プロローグ

遠い昔、1万年に一度行われる『バトルファイト』と言われる自らの種族をかけた戦いが行われ、ヒューマンアンデッドが勝った。その数百年後、再び、人々が彼らの封印を解き『バトルファイト』が行われた。

そして、怪人たちは戦いはじめ、人々をも巻き添えにしていった。それを食い止めるために開発された『ライダーシステム』と呼ばれる物を使って、人々を守るために『仮面ライダー』と呼ばれる4人が立ち向った。

恋人の仇を打ち、おのれの恐怖心をも打ち勝つために戦ったギャレン。

邪悪な心に立ち向かうために戦ったレンゲル。

怪人から人間になるために戦ったカリス。

そして、人類を救うために戦ったブレイド。

『バトルファイト』も残り一人になった。

ギラファクワガタの先祖…ギラファアンデッド。

すべてを破壊する存在…ジョーカーアンデッド、もとい、カリス。

ギャレンは、ジョーカーアンデッドが地球を滅ぼすわけがないと彼を信じ、ギラファアンデッドに単身で立ち向かった。

そして、一斉にダークローチが世界に出てきた。

レンゲルは、それをやめさせるためにジョーカーに立ち向かったが、本能にあらがえず、ジヨーカーアンデッジがレンゲルを倒してしまつ。

そして、残つたのは、唯一アンデッジを封印できるブレイドヒジヨーカーアンデッジ。

だが、ブレイドは自らがアンデッジになることで『バトルファイ

ト』に終止符を打たせなかつた。

時は流れ、約200年後。

篠ノ之束が作った『IS』は、世界に流通し始めたが、同時に戦争にも使われる可能性もあると疑い、『IS』の中心部であるコアを427個残し、行方をくらます。

ただ、『IS』は、女性にしか使えないといつことで女尊男卑になつてしまつた。

だが、女性にしか使えない『IS』を唯一使えた男、織斑一夏がいた。

そして、裏では『亡国機業』が、全世界を征服するための準備をしていた。

彼らは、見事、『亡国機業』の悪事をつぶせるのか！

運命の切り札を掴み取れ！

## プロローグ（後書き）

「メンテ、お待ちしております。」

## プロローグ2（前書き）

グダグダになってしまった。

しかも、まだプロローグだ啊！

束ちゃんのセリフもおかしくなった気がするぅ！

それでも、読みたい人はどうぞー。

## プロローグ2

「ここはとあるラボ。

ここでは、男女2人がひつそりと暮らしていた。

ガシャーーン……ウイーーーーン……ガガツ、ガガガガ

そして、今、ここで作業をしている彼女・篠ノ之 束は、427個あるコア以外のコアを使って無人機の『IS』を作っていた。

「束ちゃん！夕食できたよ！」

「はーーい！いま行つきました！」

そういうて、束は、彼女を呼んだ男・剣崎 一真に駆け寄つていつた。

「今日は、ハンバーグだ。」

「やつたー！やつたー！」

と、いい、彼に抱き着いた。

「わかつた、わかつた。」

そして、頭を撫でながら食卓へと向かつた。

一真は、食卓でテレビを見てた。

「へえ、男子が『T.S』を使える…か。」

「あつ、ソースとつて～～！」

「ああ、わかった。それで、ちょっと聞きたいことがあるんだけどさ。」

男が『T.S』を使えることのあるの?」

「ないない！あつたら男装した人か～、特殊な人間だね～。  
あつ！そつそつ、そのことでも、お願いがあるんだけどさ。」

「えつ？なに。」

久しぶりの、お願いだなあ～。と、思い、そのお願いを聞き入れることにした。

あまり、束からお願いされたことがなかつたからだ。

「あのさあ、いつくんの通つてる『T.S学園』を守つてほしいんだけどいいかなあ？」

「いつくんって、織斑 一夏のこと?」

「うん! そうだけどー!」

えつ、いつくんって一夏のことなんだ。」「あれつ、でもなんでいつくんなんて言つてるの?」「なんて言つてみたら、「いつくんと友達なんだよ。」と、言われ、大変なんだうなあ」と思った。

「で、なんで? また興味がわいたの?」

そう、篠ノ之 束は、興味がわいた人にしか話をしたことがほとんどない。

剣崎 一真も彼女にあること気に入られ、彼女のラボに(強制的に)住むことになった。

「違う違う。まあ、それも少しばら理由に入るんだけど。で、いつくんが狙われてるんだよ。亡国機業に。」

「亡国機業に。」と、言われたときに一真もタダ事ではないと思いつかれていた。

「でも、何故、彼が亡国機業に狙われているんだ?」

そうだ。彼が狙われる理由がない。  
なら、何故?

「たぶん、彼にもうすぐ贈られる『白式』が狙われてるんだと思うんだけど、『白式』は、戦闘能力は十分すぎるんだけど、テスト操縦者が乗った時は、IJS適正が全員じだつたんだ。」

「で、その『白式』が、今度、『IJS学園』に置かれることになつたからってわけなんだ。」

「それで、その『白ばく』との操縦者の織斑一夏といつしょに  
おつてくれと。」

「そつなんだけどいいかなあ？」  
と、上田遣い+涙田で言われた。

もともと、断るつもりはなかつたため、無駄なんだが。

「行くから、元に戻つていいよ。」

「そりだと思つたんだよー。」  
そういう、後ろからだしたのは、偽造した教員免許と札束を手渡  
した。

「なにこれは？特にこの免許なんだけど。」

「これは～、偽造した『ヒューリイ学園』の教員免許、これで怪しまれ  
ずに学校に教師として行けるね。」

（偽造した時点ですでに怪しまれると思つんだが…。）

「あと、このお金は旅行代ね。おるのは良こナギ、少しほ、少しあ、ゆつ  
くつしてね～。」

「えつーあつ、ありがとつー。」

「じゃあ、今日は寝よつか。」  
と、言ひ食べ終わつた皿を台所に置く。

「わかつた。じゃあ、おやすみ。」

「おやすみなさい！」

そして、夜は更けていった。

次の日、一真は自分のバイク、『ブルースペイダー』に乗り、『IS学園』に向かった。

## プロローグ2（後書き）

「メンテお待ちしておつまます。

女性の中に一人だけ男！？／新しい教育実習生登場！？（前書き）

あぶねえ！

ギリギリのところで剣崎出せた！

それでは、どうぞ！

## 女性の中に一人だけ男！？／新しい教育実習生登場！？

「ここは、『IS学園』。」

「ここでは、IS操縦者を育成する場所である。」

教師や例外を除いて、全員女子である。

「そう、例外を除いて……。」

（はあ、なんでこうなったんだろう……。）

その例外の人物……織斑 一夏は非常に困っていた。

なぜなら、彼の周りは今は女子だけ。  
これなら、反応に困るのも窺える。

では、何故、彼がIS学園に行くことになったのか。

それは、彼の勘違いにある。

彼は、本来ならば私立藍越学園に行くはずだつたんだが、試験会場を間違え、IS学園の試験機を動かしてしまったからである。

まったくもって、勘違い男である。

「では、自己紹介をお願いします。」

(どうしよう、気まずい空気だ。

この状況を開拓しなきゃって思つたけど、筹は助けてくれないし。 )

「……め君、織斑君。」

彼が、思考回路を巡つてゐる間に彼の順番が来たみたいだ。

「あの~、大声出しちゃってごめんね。

でも、『あ』から始まって、いま『お』なんだよね。」

「だから、自己紹介してくれるかな。」

「駄目かなあ?」

そういつて、お願いしてきたのは、山田 真耶先生だ。

「いやあ、そんなに謝らなくて…。」

(チャンスだ!

自己紹介なら、この気まずい空気を変えられる。 )

と、思つたのかいきなり立ち上がつた。

「あつ、えつと、織斑 一夏です。

宜しく願いします。」

と、言つたとたん、後ろ、キラーン と言つ感じの視線を感じた。

(なんか、悪いこと言つちゃつたかな。

だが、ここで黙つてると悪いイメージとつづテルが張られてしまう…)

そう思い、強く息を吸い込む。

ほかのみんなが、見守る。

「以上です！……」

言つた瞬間、他の生徒は、ガクッと倒れた。

「え、あれ、ダメでしょ」「ゴンッ！」「ズゴック！」

理解できないのか、説明しようとしたら頭上から拳骨がふつて  
きた。

「ううつー、いつたあ！つて、千冬ねえ」「バゴン！

本日一回目である。

「学校では、織斑先生だ。」

「先生、もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田君。

クラスへのあいさつを押し付けてすまなかつたな。」

と、言つて山田と交代したのは織斑 千冬だつた。

(あれ? なんで千冬ねえがここに?)

(職業不詳で、家にも数回しか帰つてこない俺の姉が……。)

そう思つてゐると千冬が自己紹介が始まつた。

「私が、このクラスの担任の織斑 千冬だ。」

「君たち新人を1年で使い物にするのが私の仕事だ。」

自己紹介が終わつた瞬間、教室が一斉に騒ぎ始めた。

「あやーーわたし、織斑先生が目標できたんです。」

「あえて光栄です————！」

「嫌いじゃないわ————！」

「つたぐ。よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。  
私のクラスだけに集中させているのかー？」  
と、言い千冬は、頭を抱え始めた。

(千冬ねえが俺の担任?)

「で、お前はあいさつも満足にできたのか?」

「千冬ねえ、これはその…。」

「織斑先生と呼べ。」

「はい。織斑先生。」

再び教室がざわめき始めたので、「静かにー」と、一喝した。

「諸君らには、EISの基礎知識を半年で覚えてもらひ。  
その後、自習だが、基本動作は半月で体にしみこませる。  
わかつても、わからなくても返事をしろ。」

ハイ！

「では、教育実習生として、紹介しておく先生がいる、入れ。」

はい、と、言ひドアを開けはいてきたのは…。

「初めまして。剣崎 一真です。お世話になるかもしれません  
が宜しくお願いします。」

そういう、剣崎は頭を下げた。

ついに、唯一EISを動かせる男…織斑 一夏と  
運命を変えた男…剣崎 一真が出会った。

さあ、物語の幕開けだ！

女性の中に一人だけ男！？／新しい教育実習生登場！？（後書き）

コメント、お願いします。

## 2時間前の助つ人／優勝者と怪物（前書き）

はあ、またグタグタだ。

俺の体もボドボドだあ！

眠いが寒いから冬眠しそう。

冬眠ではなく永眠しそう。

だが、書く。

では、どうぞ。

## 2時間前の助つ人／優勝者と怪物

時間をわかのぼり、2時間。

「ウウ～～ン……キキイーー！」

「IJKがIDS学園かあ～。

にしても大きいなあ。」

そういうて、バイクを止めたのは、剣崎 一真だ。

「どうやつて入ればいいんだ。」

そういうて、ちょうど女性が門番のよつこいたので聞いてみた。

「あのお～、入させてくれませんか？」

と、束からもらつた偽造した教員免許を見せると、女性・織斑千冬は驚いた素振りを見せるど、「ついてこい。」と言ふ、IDS学園の中に入つていったので、一真も入つていった。

「单刀直入に聞くが、お前の持つているその教員免許、偽造した物だな。」

とある一室に入られた後、そういうわれた。

「ギクウ！」

（もうばれちやつたよ、どうじょつよつ…。）

と、思った一真は、必死に逮捕されないよう抵抗した。

「違うんです…」されば、そのう…。

そう…これはその手違いでして、

間違えてつていうか「もうこい！通報はしない…」へ？

なぜ…?と思つた一真だつたが、次のことを聞いてじっくつきた。

「お前のことは束から聞いてい。」

近々、偽造された教員免許を持つてくる男がいるから、  
保護してくれとな。

で、なにが起きたんだ。」

そういうわれ、一真はこの前束に言われたことを語じた。

「どうか、私の弟が狙われていると。」

「私の弟？それってどういつ…？」

「ああ、まだ言つてなかつたな。」

私の名前は織斑 千冬。

織斑 一夏の実の姉だ。」

(ええーと、なんか見たことあるなあ。)

「あつー思い出した! そういうえばテレビで見たことがある…。  
確か、『モンティ・グロツソン』で優勝して「つるさー! …すみま  
せんでした。」

「で、なんで束はこんなはしゃぐ男を送り込んできたのか分から  
ん。」 ハア＝3

「まあ良い。あいつが選んだんだ。少しばかりしたえがあるか。」

(すいじご言ごべや…。)

「とにかくで、次からその偽装した教員免許を持つてくるのもいろ  
いと面倒だからな。」 「

「この教員免許を使え。」

と、言つて出したのは『ちゃんとした』教員免許だった。

「これは?」

「次からはこれで、学園内に入れ。

一生他の教師にばれないという保障はないからな。

これなら、半永久的に教育実習生としてここに来れる。」

(前言撤回! やさしい人だつた! )

と、心の中で涙ぐんでいた一真だつた。

「では、今日から教育実習生として来てもらひや。」

「わかりました! つて今日から! ?」

「黙つて来い！」

本日二度目だ。

「すいませんでした。」

「ううして、彼の教員実習生生活が始まった。

## 2時間前の助つ人／優勝者と怪物（後書き）

今度は、『仮面ライダー龍騎』と『とある科学の超電磁砲』をクロスしそう。

コメント、宜しくお願いします。

金髪女王／怒鳴った怪物（前書き）

金髪、登場します。

剣崎、怒鳴ります。

作者、永眠しそう。

だが、執筆します。

## 金髪女王／怒鳴った怪物

休み時間。

教室では一真と一夏が話していた。

「勉強ついていくてる?」

「いやあ、難しそうで、全然わかりませんよ。」

「だよなあ。最初は難しいもんなあ。」

「でも、頑張りますよ。」

「意気込みは、完璧だ?」「ちよつと、よろしくて?」……え?。

と、いつた、たわいのない話をしていると、二人の後ろから髪は金色でロールがかかっている少女が現れた。

見た目的には、白〇ルナと似てるといつたら似てるのかもしだい。

「まあーなんですか、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのですから、

それ相応の態度といつものがあるんではないかしら?」

「「誰(ですか)?」

「はい～～～！？」

私を知らないと？

あなたは、良いとして、教育実習生である剣崎先生まで。  
いいですか！私の名前はセシリリア・オルゴットですわよー。」

「「ふ～～ん。」」

「絶対バカにしてるでしょ！」

覚悟しな～「キーンゴーンカーンー」この恨み、あとで  
あつちりつけますわよー。  
あとで覚悟しなさいー！」

そうして、彼女は去つて行つた。

「では、ただいまの時間をクラス対抗戦にでるクラス代表を決める時間にします。」

と、山田が言つた。

すると、即座に数人が手を挙げ、その全員が織斑君がいいと言つてきた。

そうしたら、セシリアがいきなり立つて言つた。

「待つてください！納得がいきませんわ！」

「何で、納得がいかないんだ。セシリ亞・オルコット。」

と、めんどくさい千冬が言つてみた。

「そのような選出は認められませんわ！」

大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！」

わたくしに、セシリ亞・オルコットに、そのような侮辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

一夏が、立ち上がりて反論しようとしたが、一真がそれを制した。

「そもそもですわ、『いい加減にしろ！』……」

いきなり怒鳴ったのは、一真だった。

「それ以上言つてみる、オレハクサマヲムツ『ロス！

それに、ここは、いまお前のわがままを言つ時間じゃない！  
正々堂々と相手と戦つてから言え！」

どうぞのロリコンライダーの迷言を言つて、セシリ亞に怒鳴つた。

その後ろでは、彼を見直したのか、なぜか誇らしい笑みを浮かべた千冬がいた。

そして、頭を冷やしたのかセシリ亞が言つた。

「そうでしたわね。

剣崎先生の言つ通りですわ。  
このセシリア・オルロット、一夏をここ正々堂々と決闘を申し  
上げますわ。」

「ああ、臨むといふだー。」

いつして、剣崎の教育実験生活一四年が、終  
わった。

金髪女王／怒鳴った怪物（後書き）

「メンテ、お願ひします。

決闘開始／決着と異形の怪人（前書き）

熱をひいてしまった。

とにかく、だるい。

剣崎が、ほとんど出ない。

だが、書く！

## 決闘開始／決着と異形の怪人

決闘当口。

一 夏とセシリ亞が準備をしていた。

一 真は、彼が守る対象もある、『白式』が廻ったところですぐさま、向かつた。

「おい、剣崎。」

「なんでしょう、織斑先生。」

「あれが、お前が『白式』だらう。」

「そうです。  
でも、僕が守るのは一夏君や白式だけじゃありません。  
この地球上のあらゆる人々を救いたいんです。  
たとえ、この身に何が起こらうとも。」

「頼もしいな。

だが、一人で抱え込もうとするな。」

「わかつてゐつもりです。」

「2人とも。」

一 夏君がスタンバイ終わりましたよ。」

「わかつた、山田君。」

行くぞ、剣崎。」

「ハイ。」

ひつして、決闘が始まった。

「最初に言っておきますけれども、  
正々堂々と戦わなければ、  
私の小間使い。  
いえ、奴隸にしますわよ。」

「上等だ！」

そう言い終えると、いきなりセシリアがビームライフル・スター  
ライトMK-II-Eをぶつ放すと、白式に直撃し、何とか持ちこたえ  
たが、立て続けに撃つてきた。

それからは、一夏の防戦一方だった。

「さあ、踊りなさい。わたくしとブルー・ティアーズの奏でるワ  
ルツで！」

何とか、手で防御しているが、シールドエネルギーが徐々に少な

くなつていぐ。

「装備…装備…つて、これだけかよ…

まあ、素手よつつかはいいか！」

「遠距離射撃型の私に、近距離格闘型で挑もうなんて…正氣ですの…？」

と、言いながら撃つが、一夏はコツをつかんできたのか難なく避ける。

「ここのブルー・ティアーズを前にして初見で、

こいつも耐えたのは貴方が初めてですわね。

褒めて差し上げますわ。」

「わらわどひつも。」

「でも、そろそろフィナーレと参りましょ。」

すると、周囲からも撃たれるよつになつ、よけきれなくなつた。

「左足、頂きますわ…」

だが、よけられた。

「イチか、バチか…」

そうこつと、銃弾をよけ、下から上に上昇した。

「うおおお…」

近づけたとき、剣を振りかざすが後ろに後退し、よけられる。

「むちゅくひゅしますわね！」

でも、無駄なあがきですわ！」

周りからも、セシリアの銃弾が撃たれるが、一夏はわかったよう

に言った。

「わかったぜ。

こいつらは、お前が命令しないと動かない。

しかも、そのたびに、お前はそれ以外の攻撃ができなくなる。

「それは、意識を集中させてるからだ、そつだろー！」

「残り2機。

あとちょっとだー！」

「わかりましたわ。

4機だけではありますんのよー！」

「しまったー！」

セシリアの放った、ミサイルが当たる。

「えつ！

まさか、ファーストシフトー！

あなた、今まで初期設定で戦つていたとでもこいつのですかー？

「よくわからないが、これでやつと俺専用になつたみたいだな。」「

「ああ、もう面倒ですわ！」

「見えるー！」

その瞬間、周りの機体を破壊し、一気にセシリアの乗るブルーディアースに接近する。

「おりやーーー！」

そして、自身の武器…雪片式型で斬ろうとするが、いきなり、シールドエネルギーが切れ試合終了のブザーが鳴り、「勝者、セシリア・オルコット。」とアナウンスが言つ。

それもそのはず、雪片式型はシールドエネルギーを使い斬る刀だ。

そして、睡然とした顔でつたてている2人のところに、何かが落下してきた。

「危ない！」

そういう、血も一緒にセシリアを押し、その場から逃げる。

「なんだーーー？」

と、言い2人は落ちた場所を見る。

すると、そこには一体の異形の生物が立っていた。

**決闘開始／決着と異形の怪人（後書き）**

コメント、お待ちしております。

## 決着のハレ前／ターンアッパー……（前書き）

やつと、剣崎を変身をやました。

少し、セシリアにフラグを立てました。

あまり、きれいにフラグを立てられませんでしたが。

次回は、セシリアとの共闘です。

## 決着の少し前／ターンアップ！！！

決着がつく、少し前。

「テスト操縦士が動かしたとき、IS適性が全員ひだつたのが嘘みたいな動きだな。」

山田先生、一夏君のIS適性を見せてください。」

「はい、剣崎先生。

ええーと、彼のIS適性はBですね。」

「そうか、ありがとひざれこます山田先生。」

（だから、IS適性C以上の動きができるのか。）

それに、白式も一夏君が初めてとは言えすごい戦闘力。狙われるのもわかる気がするな。）

「あと、ちょっとで決着がつきますね！」

織斑先生！」

「そうだな、山田君。

だが、あいつ、時々、手を開けたり握ったりしているだひづ。そうじてるときに限つてあいつは、失敗をするんだ。」

「よく知っていますね。

やっぱり、兄弟だからでしょうか。」

「ふん。」

ブー！ブー！勝者、セシリ亞・オルコット。

「ほらな。」

「そうですね、では、迎えに行つてよ」「ドカ――――ン…」 キヤツー！」

爆音が鳴り響き、軽く地震が起きた時、真耶が倒れそうになつたが、一真が受け止めた。

が、ちょうどお姫様抱っこのようにになつてしまつた。

「大丈夫ですか！山田先生！」

「は、はい！ですが、少しこのたいせいは、ちょっと…。//」

「す、すみません！」

「なに、のんきに漫才をしている！  
今の状況を見ろ！」

「はつ！

で、なにがあつたんですか？」

「何か、落ちてきたみたいだ。  
フィールドの中央に人型の何かがある。  
拡大してみる。」

すると、そこには異形の怪物が立つていた。

「あれは…！」

「なんだ剣崎、知つてい「今すぐ、生徒を避難させてください。早く！」…わかった。

山田先生。」

「ハイ！」

「聞いていただろう。今すぐ生徒を避難させい。」

「わかりました！」

「剣崎は、「行かせてください！」わかった。  
そのために、お前はここにいるんだろ。」

「ありがとうございます。」と、言いながら彼はフィールドに走つて行つた。

「なんですね、あれは！」

彼女の眼には、落ちてきた異形の怪人…トライアルEがいた。  
一夏は、シールドエネルギーがないのでセシリアが遠くに置いてきた。

「ですが、彼には殺氣が感じられますわねえ。

私が倒してあげますわ！」

と、言いスター・ライトmk-IIを撃ち、それは直撃した。

「やつた！」

彼女は、勝利を確信したが、つかの間。

なんど、エライアルEは無傷のまま立てていた。

「なんですか？」

すると、トライアルEは、自身の右腕にあるアームガンを連射してきた。

しかし、いつまでたつても痛みは来なかつた。

えつ。

目を開けた時、彼女の前にいたのは、自身の剣……『ブレイラウザー』を持ち、銃弾をすべて叩き落としていた。

「セシリア、大丈夫か。」

八一。

「じゃあ、ミサイルを2発ほど、撃つてくれ。

あいつは、攻撃されているときは防御に専念していたからな。」「

「わ、わかりましたわ。」

そして、セシリアが2発ほど撃つたところで一真がセシリアの手を持ち、一夏と同時になるべく安全なところに避難させた。

「これから、どうするんですか？」

剣崎先生。」

「俺が、あいつを倒す。

お前たちはここから離れる。」

「でも、先生はエスが使えないのです。」

「大丈夫だ。

俺は、あいつを倒すためにここにいる。」

「で、でも1人じゃ「一夏!」千冬ねえ「織斑先生と呼べ!」はい。

「聞いていただろう。

今すぐ、避難しろ。」

「でも、彼は、「避難しろ!」…ぐつ…」

「平氣だ、一夏君。

俺は、負けない。

それに、一夏君やセシリアちゃんや他の生徒がいるこの学園を

俺は壊させない。

だから、行つてくる。」

「じゃあ！私も行かせてくださいまし！」

「でも、セシリアちゃん。」

「まだ、シールドエネルギーは残っています！」  
それに、少くとも一人、真さん一人で任せられませませんわ

1

「…優しいんだな、シリアルちゃんは。」

「わかつた。

「怪我でもされたら、責任とれないから。」

「分かりましたわ。」

「一夏君は、ここに残つてくれ。」

「でも……」「シールドエネルギーが0だよ。」「うう。」「

「平気だ、勝つて見せるから。」

「わかりました。

「勝つてきてくださいよ。」

「わかつてゐるつて。  
じゃあ、行つてくる。」

そして、一真とセシリ亞は、トライアルEのもとへ行った。

「待つていてくれたんだな。

ちょっと、下がつていってくれないか、セシリ亞ちゃん。」

「わかりましたわ。」

「俺は、学園を守る。

そして、みんなを守る。

俺は、俺は仮面ライダーだ！」

そういう、ベルトを腰に巻き、左腕を腰の位置に置き、右腕を手のひらを自分の方へ向けた状態で左斜め前方へ移動させ、高らかに叫んだ。

「変身……！」

決着の少し前、ターンアップ！！（後書き）

コメント、お待ちしております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6220z/>

---

IS ~運命を切り裂く剣~

2011年12月26日21時45分発行